

【 復活のトロパリ 第8調 】



めぐみふかきしゅよ、なんちはたかきより、
恵深主爾高
くだり、みっかのほうむりをうけて、
降三日葬受
われらをくるしみよりときたまえり、
我等苦釋給
わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
我生命復活主光
えいはなんちにきす。
榮爾歸

【 克肖女マリヤのトロパリ 第8調 】



ははよ、なんちのうちにかみのぞうによるもの、
母爾内神像由者
はたしかにすくわれたり。けだしなんちは
確救蓋爾
じゅうじかをとりにハリストにしたがい、すぎ
十字架執従が、過
やすきからだをかるんじ、ふしのものたる
易體輕不死者
たましいのためにおもんぱかることをおこない
靈爲慮行
をもっておしえたり。ゆえにこくしょうなる
以教故克肖

マ リ ヤ よ 、 な ん ぢ の し ん は し ょ て ん し と と も に よ
 爾 神 諸 天 使 と 偕 も に 喜
 ろ こ び た も う。
 給

【 克肖女マリヤのコンダク 第3調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に
 光 榮 父 子 と 聖 し 神
 き 歸 す 。
 さ き に い ん こ う に ふ け り た る も の は い ま は つ
 先 淫 行 耽 者 今 痛
 う か い に よ り て ハ ス ト の よ め と あ ら わ れ 、
 悔 由 聘 女 現
 て ん し の ど せ い に な ら い て 、 じ ゅ う じ か の ぶ き
 天 度 生 效 い て 、 十 字 架 の 武 器
 を も っ て あ つ き を ほ ろ ぼ す 。 ゆ え に
 以 惡 鬼 滅 故
 し え い な る マ リ ヤ よ 、 な ん ぢ は て ん の く に の
 至 榮 爾 天 國
 よ め と あ ら わ れ た り 。
 聘 女 現

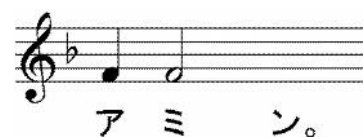
【 復活のコンダク 第8調 】



司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつわれらのぞわれらおよじゅうじゅうつみゆるわたましいからだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
 しんぢょこせいなんぢよろこびなしよせいじんきとうよ
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐



司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 主日第8調 及び克肖女の第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、



誦經) 神はイウデヤに知られ、其名はイズライリに大なり、



誦經) 神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり、



アポストロス

【 使徒経 321 半端 エウレイ書9章11節～14節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦経) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが^{じん たつ} エウレイ人に^{しよ よみ} 達する書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹みて^き 聴くべし、

誦経) ^{けいてい} 兄弟よ、^{しょうらい ふく} ハリストス、^{しさいちよう} 將來の福の司祭長^{きた} は來りて、^{さら おおい} 更に大に、^{さら ぜんび} 更に全備なる幕、

^{て つく} 手の造る^{ところ} 所に^{あら} 非ず、^{すなわち} 即其^{その} 造式に^{あらざ} 非る者に^{もの} 縁りて、^{おやぎ} 牡山羊と^{わかきおうし} 牡犢との血を^ち 以て

^{するに} 非ず、^{あら} 乃^{すなわち} 己の血を^ち 以て、^{ひとたび} 一次^{せいしよ} 聖所に^い 入りて、^{えいえん} 永遠の^{あがない} 贖を^え 獲たり。^{けだし} 蓋若

^{おうし} し牡牛と^{おやぎ} 牡山羊との血、^ち 及び^{およ} 牝犢の^{わかきめうし} 灰は、^{はい} 穢れたる者に^{けが} 灑がれて、^{もの} 之を^{そそ} 聖にし、^{これ} 肉體

^{けつじよう} の潔淨を^{いた} 致さば、^{いわん} 況や^{せいしん} 聖神に^よ 由りて、^{きず} 瑕なくして、^{おのれ} 己を^{かみ} 神に^{ささ} 獻げし^ち ハリストスの血は、

^{われら} 我等の^{りようしん} 良心を^し 死の^{おこない} 行より^{きよ} 潔めて、^い 活ける^{まこと} 眞の神に^{かみ} 奉事せしむるをや。

(比較用 口語訳) キリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。もし、やぎや雄牛の血や雌牛の灰が、汚れた人たちの上にまきかけられて、肉体をきよめ聖別するとすれば、永遠の聖霊によって、ご自身を傷なき者として神にささげられたキリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわざを取り除き、生ける神に仕える者としないうであらうか。

アポストロス

【 使徒経 208 端 ガラティヤ書3章23節～29節 】

誦経) ^{けいてい} 兄弟よ、^{しん} 信の^{きた} 來らざる^{さき} 先には、^{われら} 我等^{りつぼう} 律法の下に^{もと} 護られ、^{まも} 閉されて、^{とぎ} 信の^{しん} 顯るるを^{あらわ} 俟

^{てり} たり。斯く^か 律法は^{りつぼう} 我等を^{われら} ハリストスに^{みちび} 導く^{しふ} 師傅たりき、^{われらしん} 我等信に^よ 由りて^ぎ 義とせられん^{ため} 爲な

^{しん} り。信の^{きた} 來りし^{のち} 後、^{われら} 我等は^{すで} 已に^{しふ} 師傅の下に^{もと} 在らず。^あ 蓋^{けだし} 爾等^{なんぢら} 皆^{みな} ハリストス^{しん} イイススを^{しん} 信

^よ ずるに^{かみ} 由りて^こ 神の子なり。^{なんぢら} 爾等^{みな} 皆^{みな} ハリストスに^{おい} 於て^{せん} 洗を受けし^う 者は^{もの} ハリストスを^き 衣たり。^{すで} 既

にイウデヤ^{じん}人もエルリン^{じん}人もなく、奴隷^{どれい}も自主^{じしゅ}もなく、男性^{だんせい}も女性^{ぢょせい}もなし、蓋^{けだ}爾等^{なんぢら}皆
 ハリストス イイスに在^ありて一^{いつ}なり。若し^も爾等^{なんぢら}ハリストスに屬^{ぞく}せば、則^{すなわち}アヴラアム^{えい}の裔^{えい}
 たり、且^{かつ}許約^{きょやく}に由^よりて嗣子^{よつぎ}たるなり。

(比較用 口語訳) 兄弟よ、信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視されており、やがて啓示される信仰の時まで閉じ込められていた。このようにして律法は、信仰によって義とされるために、わたしたちをキリストに連れて行く養育掛となったのである。しかし、いったん信仰が現れた以上、わたしたちは、もはや養育掛のもとにはいない。あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのである。キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。もしキリストのものであるなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人なのである。

【 アリルイヤ 主日第8調 】

司祭) 爾^{なんぢ}に平安^{へいあん}、

誦經) 爾^{なんぢ}の神^{しん}にも、

司祭) 睿智^{えいち}、

誦經) アリルイヤ、



誦經) 來^{きた}りて主^{しゅ}に歌^{うた}い、神^{かみ}我^わが救^{すくい}の防固^{かため}に呼^よばん、



誦經) 讃^{さん}揚^{よう}を以^{もつ}て其^{その}顔^{かん}の^ばせま^えに進^{すす}み、歌^{うた}を以^{もつ}て彼^{かれ}に呼^よばん、



司祭) (黙誦：^{ひと あい しゅさい わ ところ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ し}人を愛する主 宰よ、我が 心 に神を知る智慧の 淨 き 光 を 輝 かし、我が思
^{ねん め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ}
 念の目を啓きて、爾 が福 音の 教 を悟らしめ給え、我が衷に 爾 の福たる 誠
^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ}
 を畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉 體の慾を踏み、凡そ 爾 の 喜 ぶ
^{ところ おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ}
 所 を思い且つ 行 いて、屬 神の生 活を過ぐるを致させ給え、 蓋 ハリストス神
^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいし}
 よ、 爾 は我が 靈 と 體 との光 照 なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至
^{ぜん いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ}
 善にして生命を 施 す 爾 の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音 經 マルコ福音書 47 端 10 章 32～45 節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、 肅 みて立て聖 福 音 經を聴くべし、 衆 人に平 安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} マルコ 傳の聖 福 音 經の讀、



司祭) ^{つつし き か とき じゅうにと め おのれ およ こと つ い} 謹 みて聴くべし、彼の 時 イイス、 十 二徒を召して、 己 に及ばんとする 事 を語げて曰
^{み われら のぼ ひと こ さいししちょうおよ がくしら わた かれら}
 えり、視よ、我等イエルサリムに上る、人の子は司 祭 諸 長 及び學士等に付されん、彼等
^{これ し さだ これ いほうじん わた これ はづかし これ むちう これ つばき これ ころ}
 之を死に定め、之を異邦 人に付し、之を 辱 め、之を 鞭 ち、之を 唾 し、之を殺さ
^{しこう かれだいさんじつ ふくかつ とき こ およ かれ つ}
 ん、而 して彼 第 三 日に復 活せん。時にゼウエデイの子イアコフ及びイオアン彼に就きて

いわ し われら もと ところ ねが なんぢわれら ため これ おこな かれ これ い
 曰く、師よ、我等の求むる所、願わくは爾我等の爲に之を行え。彼は之に謂えり、
 わ なんぢら ため なに おこな ほつ かれい われらなんぢ こうえい うち おい
 我が爾等の爲に何を行わんことを欲するか。彼曰えり、我等爾が光榮の中に於て、
 ひとり なんぢ みぎ ひとり なんぢ ひだり ざ たま かれら い なんぢら
 一人は爾の右に、一人は爾の左に坐せんことを賜え。イイスス彼等に謂えり、爾等の
 もと ところ し なんぢらわ の さかづき の よく わ う せん う
 求むる所を知らず。爾等我が飲む爵を飲むことを能するか、我が受くる洗を受くるこ
 とを能するか。彼等曰えり、能す。イイスス彼等に謂えり、爾等は我が飲む爵を飲み、我
 う せん う しか わ みぎおよ わ ひだり ざ わ あた あら
 が受くる洗を受けん。然れども我が右及び我が左に坐することは、我が與うべきに非ず、
 すなわちそな もの あた じゅうもん とこれ き およ いきどお
 乃備えられたる者に與えられん。十門徒之を聞きて、イアコフ及びイオアンを煇れ
 り。イイスス彼等を召して曰く、諸民の稱して王侯と爲す者其民を主り、大人等
 そのうえ けん と なんぢら し ところ ただなんぢら うち か ベ すなわちなんぢ
 其上に權を執るは、爾等の知る所なり、唯爾等の中には斯くある可からず、乃爾
 ら うち おおい ほつ もの なんぢら えきしや な ベ なんぢら うち かしら
 等の中に大ならんと欲する者は、爾等の役者と爲る可し、爾等の中に首たらんと
 ほつ もの しゅうじん ぼく な けだしひと こ きた ひと つか ため あら
 欲する者は、衆人の僕と爲るべし。蓋人の子の來りしも、人を役わん爲に非ず、
 すなわちひと つか かつおのれ いのち あた おお もの あがない な ため
 乃人に役われ、且己の生命を與えて、衆くの者の贖を爲さん爲なり。

(比較用 口語訳) イエスはまた十二弟子を呼び寄せて、自分の身に起ろうとすることについて語りは
 じめられた、「見よ、わたしたちはエルサレムへ上って行くが、人の子は祭司長、律法学者たちの
 手に引きわたされる。そして彼らは死刑を宣告した上、彼を異邦人に引きわたすであろう。また彼
 をあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺してしまう。そして彼は三日の後によみがえるで
 であろう」。さて、ゼベダイの子のヤコブとヨハネとがイエスのもとにきて言った、「先生、わたした
 ちがお頼みすることは、なんでもかなえてくださるようお願いします」。イエスは彼らに「何をし
 てほしいと、願うのか」と言われた。すると彼らは言った、「栄光をお受けになるとき、ひとりをあ
 なたの右に、ひとりを左にすわるようにしてください」。イエスは言われた、「あなたがたは自分が
 何を求めているのか、わかっていない。あなたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバ
 プテスマを受けることができるか」。彼らは「できます」と答えた。するとイエスは言われた、「あ
 なたがたは、わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けるであろう。しかし、わた
 しの右、左にすわらせることは、わたしのすることではなく、ただ備えられている人々だけに許さ
 れることである」。十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネとのことで憤慨し出した。そこで、イ
 エスは彼らと呼ばせて言われた、「あなたがたの知っているとおりの、異邦人の支配者と見られてい
 る人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。しかし、あなた
 がたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、
 仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばなら
 ない。人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがない
 として、自分の命を与えるためである」。

司祭) 彼の^か時^{とき}、ファリセイ等^らの一^{いち}人^{にん} イイススに共に^{とも} 食^{しょく} せんことを請^こいたれば、彼^{かれ}はファリセイの
家^{いえ}に入りて^い席^{せき}坐^ざせり。時^{とき}に其^{その}邑^{まち}の^{おんな}婦^{つみ}にして^{もの}罪^{かれ}ある者^い、彼^{かれ}がファリセイの家^{いえ}に^{せき}席^ざする
を知^しりて、香^{におい}膏^{あぶら}を盛^もれる玉^{ぎよく}の^{うつわ}盒^{たづさ}を携^{きた}え來^{その}り、其^{その}後^{うしろ}に^{あし}足^{もと}の下^たに^な立^なち、哭^{なみだ}きて、^い涙^{せき}
を以^{もつ}て其^{その}足^{あし}を濡^{うる}し、己^{おのれ}の^{こう}首^べの^け髪^{もつ}を以^{これ}て之^のを拭^ごい、其^{その}足^{あし}に^{せつ}接^{ぶん}吻^{これ}して、之^{これ}に^{におい}香^{あぶら}膏^い
を抹^ぬれり。彼^{かれ}を招^{まね}きたるファリセイは此^{これ}を^み見て、己^{おのれ}の^{うち}中^いに^こ謂^{ひと}えり、此^この^{よげん}人^{しゃ}若^しし預^よ言^{げん}者^{しゃ}たら
ば、彼^{かれ}に^{さわ}捫^{もの}る者^{だれ}の^{いか}孰^{おんな}たり、如何^しなる^{けだし}婦^こたるか^{ざい}を^{ちよ}知らん、蓋^{かれ}是^{これ}れ罪^い女^{なんぢ}なり。イイスス彼^{かれ}に
答^{こた}えて曰^いえり、シモンよ、我^{われ}爾^{なんぢ}に^い言^{こと}うべき事^{かれ}あり。彼^し曰^{これ}く、師^いよ、之^いを^い言^いえ。イイスス曰^いえ
り、或^{ある}債^{かし}主^{ぬし}に二^{ふた}人^{たり}の^ふ負債^{さい}者^いありて、一^{ひとり}人^は銀^{ぎん}五^ご百^{ひゃく}枚^{まい}、一^{ひとり}人^は五^ご十^{じゅう}枚^{まい}を^お負^{その}えり、其^{その}償^{つくの}
う^{あた}能^よわざるに^{かれ}因^{ふた}りて、彼^{ゆる}は二^{しか}人^{ふた}に^{うち}免^{かれ}せり、然^{あい}らば二^{いづれ}人^おの中^お彼^いを^{なんぢ}愛^いすること孰^いか多^なからん、
試^{こころ}に^み言^いえ。シモン對^{こた}えて曰^いえり、意^{おも}うに、多^{おお}く^{ゆる}免^{もの}されし者^{かれ}ならん。彼^{これ}は之^いに^{なんぢ}謂^いえり、爾^{なんぢ}
が議^はりし^{ただ}こと^こ正^こし。是^こに^{おい}於^{おんな}て^{かえり}婦^いを^{なんぢ}顧^こみて、シモンに^{おんな}謂^みえり、爾^{われ}此^{なんぢ}の^{おんな}婦^みを^わ見るか、我^{われ}
爾^{なんぢ}の家^{いえ}に^い入^いりしに、爾^{なんぢ}は我^わが^{あし}足^{ため}の^{みづ}爲^{あた}に^{しか}水^{かれ}を^{なみだ}給^{もつ}えざりき、然^わるに^{あし}彼^{あし}は^{あし}涙^{あし}を^{あし}以^{あし}て我^{あし}が^{あし}足^{あし}
を^{うる}濡^こし、^{こう}首^べの^け髪^{もつ}を^{これ}以^のて之^ごを^{なんぢ}拭^{われ}えり。爾^{せつ}は我^{ぶん}に^{しか}接^{かれ}吻^わせざりき、然^わるに^こ彼^こは、我^こが^こ此^こに
入^いりし^{とき}時^わより、我^{あし}が^{せつ}足^{ぶん}に^や接^{なんぢ}吻^わして^{こう}已^べめず。爾^{あぶら}は我^ぬが^{しか}首^{かれ}に^{しか}油^{かれ}を^{しか}抹^{かれ}らざりき、然^{しか}るに^{かれ}彼^{かれ}は
に^{におい}あぶら^わを^{あし}我^ぬが^こ足^{ゆえ}に^{われ}抹^{なんぢ}れり。是^つの^{かれ}故^おに我^{つみ}爾^{ゆる}に^{けだし}語^{かれ}ぐ、彼^おの^{つみ}多^{ゆる}くの^{けだし}罪^{かれ}は^お赦^おさる、蓋^お彼^お多^お
く^{あい}愛^{しか}せり、然^{すくな}れども^{ゆる}少^{もの}く^{すくな}赦^{あい}さるる者^{すなわち}は、少^いく^{なんぢ}愛^いするなり。乃^{なんぢ}婦^いに^{なんぢ}謂^いえり、爾^{なんぢ}の
罪^{つみ}は^{ゆる}赦^{かれ}さる。彼^{とも}と^{せき}共^ざに^{もの}席^{おのれ}坐^{うち}せる者^い己^この^{なん}中^びに^{つみ}言^{ゆる}えり、此^{かれ}れ何^い人^いにして^い罪^いをも^い赦^いすか。彼^い
婦^{おんな}に^い謂^{なんぢ}えり、爾^{しん}の^{なんぢ}信^{すく}は^{あん}爾^{ぜん}を^ゆ救^いえり、安^い然^いとして^い往^いけ。

(比較用 口語訳) あるパリサイ人がイエスに、食事を共にしたいと申し出たので、そのパリサイ人の
家にはいって食卓に着かれた。するとそのとき、その町で罪の女であったものが、パリサイ人の家
で食卓に着いておられることを聞いて、香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて、泣きながら、
イエスのうしろでその足もとに寄り、まず涙でイエスの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そし
て、その足に接吻して、香油を塗った。イエスを招いたパリサイ人がそれを見て、心の中で言った、
「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ。

それは罪の女なのだから」。そこでイエスは彼にむかって言われた、「シモン、あなたに言うことがある」。彼は「先生、おっしゃってください」と言った。イエスが言われた、「ある金貸しに金をかりた人がふたりいたが、ひとりは五百デナリ、もうひとりは五十デナリを借りていた。ところが、返すことができなかったで、彼はふたり共ゆるしてやった。このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか」。シモンが答えて言った、「多くゆるしてもらったほうだと思います」。イエスが言われた、「あなたの判断は正しい」。それから女の方に振り向いて、シモンに言われた、「この女を見ないか。わたしがあなたの家にはいつてきた時に、あなたは足を洗う水をくれなかった。ところが、この女は涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でふいてくれた。あなたはわたしに接吻をしてくれなかったが、彼女はわたしが家にはいつた時から、わたしの足に接吻をしてやまなかった。あなたはわたしの頭に油を塗ってくれなかったが、彼女はわたしの足に香油を塗ってくれた。それであなたに言うが、この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない」。そして女に、「あなたの罪はゆるされた」と言われた。すると同席の者たちが心の中で言いはじめた、「罪をゆるすことさえするこの人は、いったい、何者だろう」。しかし、イエスは女にむかって言われた、「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。



※ 聖体礼儀③（聖大ワシリイ）へ